

色と模様における感性伝達 ―文字色や文字の模様の役割―

0432037番 沖野 友香

指導教員： 柴橋 祐子 准教授 山崎 治 助教

1. はじめに

デジタル化が進む現代、Web ページやメールなど文字で考えや感情を伝える機会が多くなった。しかし文字だけではその単語にどのような印象を持っているのかまで伝える事は難しく、互いの印象の違いで誤解や混乱を招いてしまう。最近では文字に色をつける事で感性を盛り込んでいくものが見られるようになってきた（デコメール、ホームページなど）。そこで、色だけでなく模様を加える事により更に感性が伝わりやすくなるのではないかと考えた。

2. 目的

本研究では文字で感性や考えを伝える際、文字に色と、フォントとは異なったデザイン的な要素として模様を加えることによって起こる感性の伝達効果について明らかにしていくことを目的とする。

3. 予備調査

単語のイメージについて本調査を行う前に材料として用いる模様の種類として何が適切か絞り込み、選別するため、予備調査を実施した。

(1) 予備調査 1

- ・調査対象 本学情報科学部学生 5 名
- ・方法 文字が印刷された 10 種類のカードを作製し似たような印象をもつカードでグループ分けしてもらった。

(2) 予備調査 2

- ・調査対象 本学情報科学部学生 5 名
- ・方法 質問用紙による SD 法を使用し、文字に模様と色を組み合わせたものについて 18 対の形容詞に対して、回答してもらった。似た傾向を持つもので分類分けし、代表とする模様を決定した。

4. 本調査

予備調査で分類分けした模様について代表のものを使用し、どの様なイメージや印象を受けるのかを調査する。

4.1 方法

- ・調査対象 本学デザイン学部学生 112 名
- ・方法 質問紙による SD 法を使用し、文字に模様と色を組み合わせたものについての印象を回答してもらった。模様は縞細、縞太、市松細を、色は赤、

青、緑を使用した。

4.2 分析方法

- (1) 分散分析：各形容詞対の得点から、色の要因と模様の要因から成る二要因分散分析を行った。
- (2) 因子分析：模様と色の組み合わせにより、文字全体に対してどのような印象がもたれるのかを調べるために因子分析を行った。

4.3 結果と考察

分散分析の結果、ほとんどの形容詞対の得点において、色と模様の交互作用に有意差が認められた（代表的な結果として「明るい⇔暗い」における得点を図 1 に示す）。この結果より色に模様を組み合わせることで、多様な印象の違いを生み出せる可能性が指摘できる。

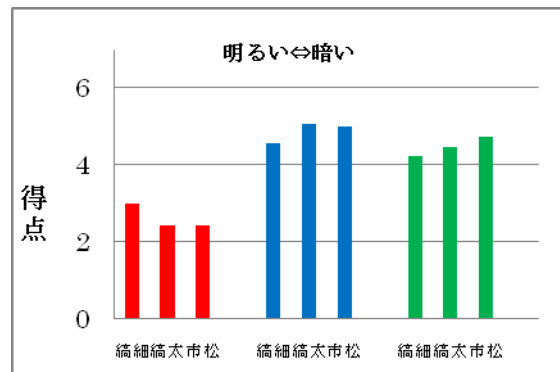


図 1：色と模様による印象の得点の変化

(0=明るい、6=暗い)

因子分析の結果、模様を組み合わせることで色の本来持つイメージを変えることができることが明らかとなった。また、重要な因子として「暖かい⇔冷たい」や「陽気な⇔陰気な」で表わされる「感覚的因子」、「好きな⇔嫌いな」や「美しい⇔汚い」で表わされる「価値的因子」が認められた。

5. おわりに

今回の調査を行った結果、「色と模様は互いに影響し、異なる印象を生み出す」ことがわかった。これにより、色と模様の組み合わせや色や模様を変更することで文字から受ける印象を操作できる可能性が示された。今後、携帯端末や Web 上のページにおいて色や模様などが感性伝達の一手段として利用されることが期待される。